第十二講　物語・小説の読解③

Step 1

一　次の文章を読み、あとの(1)～(6)の問いに答えなさい。

> 五人一組で参加する俳句甲子園。加藤東子(はるこ)たちの俳句同好会は、二年生三人と一年生三人の六人。敗者復活戦で「草笛」という題を与えられた彼女たちは、一時間以内にチームとしての一句を提出しなければならない。

「友呼ぶ草笛は耳にやはらかし」

会長の須崎茜(あかね)が自分の披講(注1)を終わらせ、井野瑞穂(みずほ)を見る。打てば響くように瑞穂が続けた。

「草笛は空耳課題はかどらず」

一年生三人の披講は、誰が決めたわけでもないのに順番が一定になっている。桐生夏樹(きりゅうなつき)、北条真名、三田村理香。

今もその順に、テンポよく披講が行われた。

「海遠し青き匂(にほ)ひの草の笛」

「草笛を鳴らせぬ子らの赤き頰」

「草笛や十二音階定まらず」

みんな、自分らしい句を詠(よ)んでいる。夏樹は最近「の」の音を重ねるのに凝っていたし、真名は子どもを詠むのが好き、理香はきっと草笛でピアノみたいに演奏ができないことがもどかしかったのだろう。

そんなことを思いながらも、実は、東子は最初の句を読んだ時の、きっぱりとした茜の声が耳から離れない。

――友、か。

顔を上げると五人の目とぶつかる。そうだ、東子は六番目の会員だ。

東子は口を開いた。俳句甲子園への練習が本格的になってきてから、全く作句に参加してこなかった。自分に才能がないのはすぐに思い知らされたし、東子が作句したら選手、特に瑞穂が気にしそうだったから。でも、披講するならこの順番だろう。(注2)スタメンではないけど会員であるマネージャー、いや副会長の東子。

「草笛や言葉にまとめられぬもの」

それまでノートに一心不乱に書きつけていた瑞穂がはっとしたように顔を上げた。その横の茜は、一瞬ぽかんとしてから、徐々に表情をほころばせる。

A 魔法のようだ。

友呼ぶ草笛は耳にやはらかし。

草笛や言葉にまとめられぬもの。

茜と句をやり取りしただけで、ほかに何も話していないのに、気持ちが通じ合ったと思えた。

「言葉にまとめられぬもの、ですか」

夏樹がつぶやいたことで、茜も我に返ったようだ。ふっと息をついて会員を順に見ながら口を開いた。

「どう？　どの句が一番気になった？」

発言を促され、真名が言った。

「私、(注3)トーコ先輩の句です。『言葉にまとめられぬもの』。草笛と言葉、その対比を思わせる感じが好きです」

東子はどきどきしてきた。きっと顔が赤くなっている。

東子の句を、いいと言ってくれた。創作で評価された。

だが、すぐに理香がこう発言したので、話は次に移った。

「私ね、誰の句っていうより、草笛に対して結構みんなネガティブだなあって、それが印象的だった。井野先輩の草笛は［B］、私の草笛も音階が不確かで不完全燃焼な気持ちについての句だし、真名にいたってははっきり『鳴らせぬ』だよ」

夏樹が抗議する。

「仕方ないんじゃない？　だって、みんなでためしに草笛に挑戦してみたけど、誰一人吹けなかったんだから」

この一年生トリオは強い。さっきの負けも引きずらない。東子はやっと肩の力が抜けるのを感じた。C<u>小さく笑ってみる</u>。と、瑞穂と目が合った。穏やかな表情で返してくれる。

「いいじゃない、それも草笛だよ。うまくいかない、あぶなっかしいもの。私たちの草笛の解釈はそういうことなんだよ。あ、あと会長が珍しく破調(注4)で詠んでるのも面白かった。『草笛は耳にやわらかし』と『友』の取り合わせっていいと思う」

それまで黙っていた茜が口を開いた。

「うん。『友』にはいろんな友があるよね。いろんなことを話してきた、たくさん話してもらってきた、それが『友』との言葉ならばきっとどんな言葉でも結局は耳にやわらかいんじゃないかって、そういうのも草笛に託したかった」

茜の言葉を聞いているうちに、また胸がどきどきしてきた。茜はずっとみんなの顔を見回していて東子の方を一度も見ていないが、D<u>この言葉も東子に向けられているのではないか</u>。

その東子の動悸(どうき)は、続けて瑞穂が言ったことでさらにたかまった。

「そうだよね、私たち覚えていられないほどたくさんしゃべってきてるんだものね」

――この人たち。

その時茜の目が東子をまっすぐに見た。

東子は何も言えずに、ただうなずいた。

そう。たくさん話してきた。これからも。時には『言葉にまとめられぬもの』があっても。

（森谷明子「春や春」より）

（注1）披講＝詩歌を読み上げること。
（注2）スタメン＝スターティングメンバーの略。
（注3）トーコ先輩＝東子のこと。
（注4）破調＝定型詩で音数に多少が生じること。

(1) 「草笛」はどの季節の季語か。**漢字一字**で書きなさい。

(2) 文章中にA<u>魔法のようだ</u>とあるが、このとき東子の目に映った様子を、「句」、「一変」という言葉を使って、**十五字以上、二十字以内**で書きなさい。

(3) 文章中の［B］に入る言葉として最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　夢の中でしか聞くことができないし　　イ　勉強の邪魔になるほどにうるさいし
ウ　友に語りかけるようにやわらかいし　　エ　本当に聞こえているものじゃないし

(4) 文章中にC小さく笑ってみるとあるが、このときの東子の心の内について述べた次の文の［Ⅰ］、［Ⅱ］に入る言葉を書きなさい。ただし、［Ⅰ］は**一語**で書き、［Ⅱ］は「意見」という言葉を使って、**十字以上、十三字以内**で書くこと。

自分の［Ⅰ］が和らぐのを感じるとともに、［Ⅱ］をほほえましく感じている。

Ⅰ［　　］

Ⅱ［　　　　　　　　　　　　　］

(5) 文章中にDこの言葉も東子に向けられているのではないかとあるが、東子がこのように感じた理由を述べたものとして最も適当なものを、次のア～エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　自分の句が、会長である茜の心に『言葉にまとめられぬ』ほど『やはらか』く響いているように感じたから。
イ　自分の句は、『友』を『言葉にまとめられぬ』ほど大切にする茜にとって物足りない点があると感じたから。
ウ　茜の句は、以前二人で一緒に聞いた『草笛』の心地良い響きや『やはらか』さを基にしていると感じたから。
エ　『言葉にまとめられぬ』思いを、茜が『草笛』に託した思いと重ねて説明してくれているように感じたから。

［　　］

(6) 文章中に描かれている東子の心情の変化を説明したものとして最も適当なものを、次のア〜エのうちから一つ選び、その符号を書きなさい。

ア　他の会員に引け目を感じていたが、満足する句が詠めたことで、副会長としての自信と選手としての充実感を取り戻している。
イ　不安定だった仲間同士の関係が、作句と批評を通じて互いの本音を伝え合う中で安定しはじめたので、肩の荷をおろしている。
ウ　初めは遠慮があったが、自分の句が皆の心に響いているのを実感し、仲間が温かく受け止めてくれることを心強く感じている。
エ　マネージャーの仕事に徹してきたが、言葉の取り合わせが評価されたため、作句においてこそ存在感を示せると確信している。

【千葉県】

二　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ニンジンも食べなきゃダメよ、秀子（ひでこ）。」
ママが妹に言うのを聞くと、達夫（たつお）は大急ぎでニンジンの(あ)煮物を口にほおばった。
「ほら、お兄ちゃんを見てごらんなさい。」
□ママは言い足した。食事のときは、きまってそうなのだ。
小学一年生の達夫は、死ぬ思いで口のなかの嫌な味を飲み込んだ。お皿には、まだ二つ残っている。ついでに、つぎつぎとほおばって、必死で喉へ押し込む。すぐに水を飲めば、なんとか我慢できる。
「ほらほら、お兄ちゃんなんか、みんな食べちゃったわよ。さあ、秀子も食べなさい。」
四歳の妹は、ニンジンの半欠けを口にねじ入れられて、泣きべそをかきながら食べはじめた。
「秀子、……えらいなあ。」
達夫が大人っぽく励ますと、妹は涙をあふれさせながらも、微笑（ほほえ）んでみせた。
いつでも、こうである。
たとえば、ママと三人でお買い物に行ったとき、秀子がダダをこねはじめる。
「ねえ、ママ、ジュース。」
秀子でなくても冷たいジュースかコーラを飲みたいと思うような(い)あつい日でも、
「おうちに帰ってからにしましょうね。」
と、ママが言おうものなら、なぜか達夫はじっと我慢してしまう。
「秀子。……水、飲もうな。」

妹の手を引いて、水飲み場へ連れていく。そんなようすを、ママは横目で見て、感心感心とばかりに微笑んでいる。

達夫が我慢づよくなったのは、秀子が幼稚園に入ったあたりからだ。

そのころ達夫は同じ幼稚園の年長組だったから、毎日、1通園バスで出かけて帰宅するまで、妹の世話をすることになった。秀子のほうも兄にべったりへばりついて、頼りにしていたのは言うまでもない。

「お兄ちゃん、たのむわね。……秀子のお手本になってちょうだいよ。」

ママが口ぐせのように言った。

初めは、お手本という言葉の意味など分からなかった。しかし、なんとなく妹の面倒を見ているうちに理解するようになった。

いつも秀子が見ていて真似(まね)するから、ぼくは立派にしなくちゃいけないんだな。

すると、急に自分が大人になったような気がした。とてもいい気持ちだった。それからというもの妹の前では、つねにお手本となるように努めてきた。

だけど、お手本って、とってもたいへんなことだな。なんでもかんでも我慢しなくちゃなんないんだから。このごろ達夫は、そう思っている。

六月の末になって、ぐずついた天気がつづいたためか、達夫と秀子は風邪をひいた。

「二人とも寝冷えしたのかしら?」

ママが薬を買ってきて飲ませたが、なかなか治らないばかりか、高いねつが出はじめた。食欲もなく、お腹(なか)も下している。

「たいへんだわ、お医者さんに行かなきゃ。」

あわてて二人を病院へ連れていくと、

「ダメですねえ、こんなになるまで放っておいては。……脱水㋒症状を起こしてますよ。」

お医者さんが言った。

「すぐに注①点滴をしましょう。」

注②看護婦さんが二人を処置室へ連れていき、別々のベッドに寝かせた。すでに秀子は、べそをかきはじめていた。

消毒薬の匂い、注射器の列、真っ白いベッドとカーテン、看護婦さんの真剣な表情。そのうえ、おろおろしているママの姿。2べそをかくのは当然だ。達夫だって膝がふるえ、胸も波うって、㋓あやうく泣きだすところを、じっと我慢しているのだ。

やがて点滴のビニール管が、ベッドのそばに吊り下げられた。看護婦さんが近づいてきて、まず達夫の左腕をとった。ゆっくりと、するどい針を刺した。

「……ママ。」

達夫は思わず泣き声を上げかけたが、

「痛くないよう。ちっとも痛くないよう。」

すんでのところで、そう言った。

ママは達夫に顔を寄せて、ささやいた。

「えらいわね。……でも、お病気のときは我慢しないで、泣いてもいいのよ。」

しかし、達夫は隣のベッドに目を向けて、怖そうに見つめている妹へ笑ってみせた。

「3ちっとも痛くないよ、秀子。……ちょっとチクッとするだけさ。」

秀子は目に涙をためて、しゃくり上げながらも、素直にうなずいた。

看護婦さんが注射針を持って、隣のベッドへまわっていった。どうしたわけか、針を刺しても、秀子は泣かなかった。

「なっ、お兄ちゃんの言うとおりだろ?」

達夫が優しく言うと、きつく目を閉じた妹が、またうなずいた。

（内海隆一郎「お手本」より）

（注）① 薬や栄養などを少しずつ静脈内に注入すること。
② 女性看護師の古い呼び名。

Step 2

問一　二重傍線（‖）部あ、うの漢字に読みがなをつけ、い、えのひらがなを漢字に直しなさい。

あ［　　］　い［　　］い　う［　　］　え［　　］うく

Step 2

問二　次のア～エの中から、傍線部1と同じ構成の熟語を一つ選び、記号で答えなさい。

ア　粗雑　　イ　県営　　ウ　盛衰　　エ　遭難

［　　］

Step 2

問三　次のア～エの中から、本文中の［　　］の中に補う言葉として最も適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア　口をあわせて　　イ　口をそろえて　　ウ　思ったとおり　　エ　思いがけず

［　　］

Step 3

問四　傍線部2のように秀子の様子を表現しているのは、いくつかの状況をふまえてのものである。その状況として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　達夫でさえ泣きだしそうになるのを我慢している。
イ　看護婦が達夫の左腕をとり、するどい針を刺している。
ウ　秀子と達夫が病院の処置室で、別々のベッドに寝ている。
エ　看護婦が真剣な表情をしており、ママもおろおろしている。

［　　］

Step 3

問五　本文中の二つの波線（〰〰）部の秀子の動作には、達夫に対する秀子の気持ちが表れている。秀子が達夫に対して、日ごろから、どのような気持ちで接しているのかが最もよく示されている七字の表現を、本文中から抜き出しなさい。

Step 3

問六　傍線部3のように達夫が話した言葉には、秀子へのどのような思いが込められていると考えられるか。ここでの達夫の秀子への思いを、それまで達夫が考えていたお手本の意味を含めて、六十字程度で書きなさい。

【静岡県】

〈Note〉

第十二講　物語・小説の読解③

Step 1

一

解答

(1) 夏　(2) 自分の句で瑞穂と茜の表情が一変した。(18字)(同意可)　(3) エ　(4) Ⅰ、緊張　Ⅱ、遠慮せずに意見を言う一年生(13字)(それぞれ同意可)　(5) エ　(6) ウ

解説

(1) 草を使うので、最も緑が豊かな季節を表す。

(2) 直前の「瑞穂がはっとしたように顔を上げた」「茜は…徐々に表情をほころばせる」に着目する。東子が披講した直後に「一変」した二人の様子をまとめる。

(3) 「井野先輩」の句は「草笛は空耳課題はかどらず」である。「空耳」は実際は聞こえていないのに、聞こえたような気がすること。

(4) Ⅰ、句評が始まって、東子は自分の句についての評を聞き「どきどきしてきた」のだが、そのあと「肩の力が抜けるのを感じ」て、小さく笑っている。張りつめていた気持ちがほぐれている。Ⅱ、「この一年生トリオは強い…引きずらない」というように、一年生の意見のやり取りを聞いて、ほほえんでいることに着目する。

(5) 茜の「それが『友』との言葉ならば…耳にやわらかいんじゃないか」という言葉が、東子の句の「言葉にまとめられぬ」に通じるものがあり、続く瑞穂の「覚えていられないほど…しゃべってきてる」も、それを裏付けている。

(6) 東子は「六番目の会員」であり、作句すると「自分に才能がないのは…瑞穂が気にしそうだった」と思っている。そんな中で、今自分の句が「いいと…評価された」こと、その後の茜と瑞穂の言葉によって、自分が仲間に受け止められていることを東子は強く感じている。

Step 2・3

二

解答

問一、あにもの　い暑(い)　うしょうじょう　え危(うく)　問二、エ　問三、ウ　問四、イ　問五、頼りにしていた

問六、それまでは妹が真似をするから立派に行動するということがお手本の意味であり、ここでは妹を安心させようという思い(が込められている)。(55字または63字)(同意可)

解説

問二、上の漢字が動作を表し、下の漢字がその対象を表している。アは同意の漢字の組み合わせ、イは上下の漢字が主述の関係、ウは反意の漢字の組み合わせ。

問三、「食事のときは、きまってそうなのだ」とあるので、ママの言うことが予想できたことを表す言葉を考える。

問四、「二人を処置室へ…別々のベッドに寝かせた」「看護婦さんの真剣な表情…おろおろしているママの姿」「達夫だって…泣きだすところを、じっと我慢しているのだ」という状況である。看護婦が達夫の左腕にするどい針を刺すのは、このあとの場面である。

問五、幼稚園にいるときの二人の様子に着目する。達夫が「妹の世話」をし、「秀子のほうも兄にべったりへばりついて…」という関係から、秀子の気持ちをおさえる。

問六、「秀子のお手本になってちょうだいよ」と言われて、はじめは意味がわからなかったが、そのうちに「いつも秀子が見ていて…立派にしなくちゃいけないんだな」と理解するようになっている。また、ここは、ママから「お病気のときは我慢しないで、泣いてもいいのよ」と言われたにもかかわらず、達夫が「怖そうに見つめている妹」に笑ってみせ、「ちっとも痛くないよ」と優しく声をかけている場面である。